

2022年度から始まる必修の「地理総合」。そのなかの「国際理解と国際協力」について、どのような授業が考えられるか、モンゴルを事例に考えてみたい。普段は取り上げる機会が少ない地域への理解を深めることで、地域全体の特徴をとらえやすくなる。これから紹介する内容は、2019年7月末から8月上旬に私がモンゴル国を訪ねた体験をもとに、授業における留意点をまとめたものである。

1. モンゴルの概況

日本とモンゴルは直行便で5時間半、約半日で着く。現在のモンゴル国は、1924年にモンゴル人民共和国として成立した（1992年、自由主義経済へ移行しモンゴル国に改称）。当時、モンゴル人民共和国はソビエト連邦に次いで、世界で2番目に誕生した社会主義国であった。モンゴルはソ連と中華民国に挟まれ、大国間の国際政治に翻弄された。外モンゴル（現在のモンゴルにあたる地域）は、辛亥革命（1911年）に際して独立を宣言したが、中華民国は清の版図の継承を主張し、これを認めなかった。その後、モンゴル、ロシア、中華民国の間で結ばれた協定で、中華民国の宗主権下でのモンゴルの自治が認められた。なお、「外モンゴル」「内モンゴル」という呼称には注意が必要だ。これは清の立場からの呼び方であって、モンゴル人は好まない。2019年はノモンハンでの戦いから80年目の年にあたり、モンゴル人にとって、この戦争での勝利が国家独立につながったという意識がある。地理分野の学習でも、歴史的背景を押さえておくことが「国際理解」においては重要である。

基本データから、モンゴルは面積の広さの割に人口が少なく、人口密度が世界で最も低い国であることがわかる。その要因は、自然環境から理解できる。

自然環境と生活文化の関わりは深い。学習においては以下の地名を確認するとよい（図1）。大シアンリン山脈（大興安嶺山脈、東に越えると中国東北地方）、ゴビ砂漠（内モンゴル自治区と「万里の長城」に着目させる）、モンゴル高原、ハンガイ山脈（森と草原が豊かな山岳地帯。モンゴル帝国はこの地のカラコルムを首都とした）、アルタイ山脈（西に越えるとジュンガル盆地、カザフスタン・中央アジアへの入口）。ロシアでは、バイカル湖の周辺にあるアルタイ共和国・トゥーヴァ共和国・ブリヤート共和国、カスピ海の北西にあるカルムイク共和国にモンゴル系の民族が暮らしている（図2）。「民族分布」を自然環境との関連のなかで考える機会をつくることで、ある民族が多く居住する地域から離れた地域にみられる場合、その理由を考察の対象に設定できる。主題図を活用し、複雑な民族分布や歴史的背景を知することは、課題解決学習の手掛かりとなる。

2. モンゴルの発展する都市

モンゴルの「都市」をみてみよう。首都ウランバートル（ウラン=赤い、バートル=英雄）にある国際空港の名は、チンギス=ハーン空港。ソ連崩壊後、チンギス=ハーン（1162～1227）が見直されている。空港に降りたった時、夏とは思えぬ冷たい風と曇天に驚いた。気温は15℃、風が吹いているため、体感温度はそれ以下である。



図1 モンゴルの自然環境と位置（詳解現代地図 p.72「ユーラシア北部」より）

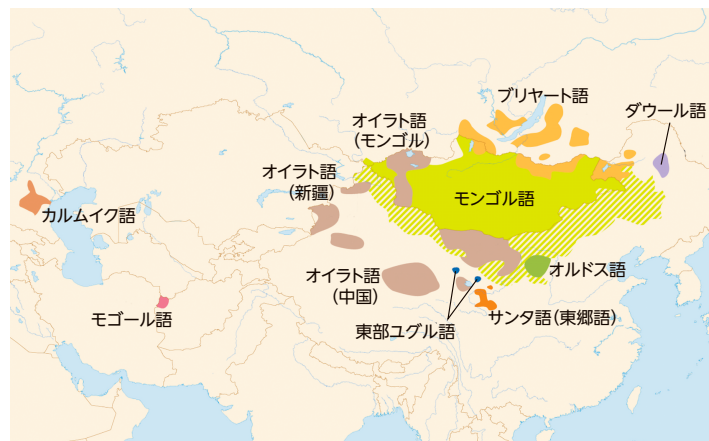


図2 モンゴル系言語の話者分布



モンゴルの基本情報と日本との比較
(地理統計要覧 2021年版 Vol.61)

面積 156万4000 km²
人口 327万8000人（2020年）
首都 ウランバートル 141万8000人（2016年）
(首都の総人口に占める割合：約43%)
人口密度 2人/km²（2019年）

日本の約4.1倍
日本の約2.6%
(日本約7.3%)
日本329人/km²



写真3 建設中のビル（ウランバートル）



写真4 オフィスビルとコンビニエンスストア

空港から市内への道中、建設中のビル群を見た（写真3）。「遊牧の国」のイメージがあるモンゴルだが、定住化が進んでいる。ウランバートルには総人口の約4割以上の約140万人が暮らす。鉄道は長距離専門で、地下鉄はなく、市内では車の混雑が目立つ。街の中は高級外資ホテル、ファストフード店、個人商店などが道沿いに立ち並ぶ（写真4）。中心街だけをみれば、日本の都市と変わりはない。民主化（1991年ソ連崩壊後）以降、市場経済が浸透している。経済は鉱物（石炭）の輸出や繊維製品（カシミア、羊毛など）の生産が中心で、観光業も注目を集める。最近ではヨーロッパからの観光客に対応するため、英語を学習する人が増えているという。都市の活況を見ながら、水の確保が気になった。これは環境問題の考察課題にもできそうである。

3. モンゴルの草原で見た生活文化

草原の暮らしに話題を移そう。ここで『詳解現代地図』p.16の気候区分の読み取りをさせるとよい。馬や羊・ヤギの放牧の規模は自分の想像をこえ、1,000頭規模で放し飼いになっていた（写真5）。爽やかな夏は短く、9月を過ぎれば冬がやってくる。マイナス20℃に近い厳しい冬を乗り越えるため、夏はその準備をする貴重な期間である。



写真5 遊牧風景

草原に立つと、樹木のない景観の広さを実感する。

滞在中は、観光客向けのツーリスト・キャンプに宿泊し、そこでヤクを間近で見た。このほかに、糞を固めて保管してあるカゴ、外に干してある羊の肉、チーズを固めたもの、毛皮を叩いて柔らかくするもの、草原の暮らしの特徴が随所で見られた。ある一家の若者は、普段はウランバートルのような都市で働き、夏は休みを取って村に戻り、家族と家畜の世話をするという。小さな子どもも慣れた手つきで乳を発酵用のバケツに詰め替えるなど、手伝いをしていた。

宗教文化では、モンゴルの人々の大半はチベット仏教を信仰している。ソ連時代に相当数の寺院が壊され、役所として使われたものなどだけが、わずかに残った。特定の時代の政治状況で文化が消されてしまうことを、生徒たちに伝えておきたい。

都市での生活は便利ではあるが、逆に考えれば、国民の半数は草原での暮らしを選んでいる。ソ連崩壊後の約10年間、生活の維持に国民は大変苦労したという。それでも、新しい国を創るという希望で、人々は生き生きしているように見えた。

【参考文献】

D・マイゲル 著・加藤九祚 訳『草原の国モンゴル』、新潮選書
金岡秀郎『モンゴルを知るための65章 第2版』、明石書店



写真6 ゲルの組み立て テントの上はぼっかり空いている。この空間が、実用的にも、宗教的な意味も含んでおり、重要だと教えられた。組み立ては、木骨で大枠を建てた後、ビニールとフェルトで覆っていき、完成させる。慣れた者数人でかかれば、大きいものでも1時間程で完成させられるという。